

## 2023年(令和5年)に 起立400年を迎える東海道川崎宿

「川崎」というとどのようなイメージを抱くでしょうか。大都市：市の人口は150万人を突破し、未だ増加の一途をたどっています。工業のまち：多くの企業や工場を抱え、特に東京湾に面した臨海部の工業地帯は全国有数の工場夜景スポットとしても脚光を浴びています。音楽のまち：様々なジャンルの音楽フェスティバルの開催や人気ミュージシャンの輩出が近年注目を浴びています。そして、宿場町：東海道の起点・日本橋から数えて2番目の宿場町という顔も持つのです。そんな川崎は、2023年(令和5年)に宿場町として起立して400年を迎えます。

江戸時代における五街道の1つ・東海道の宿駅制度は、慶長6(1601)年正月、江戸幕府が東海道の駅制を定め、戦国期の宿駅を母体としつつ、改めて諸駅を設定したことにより歴史が始まりました。川崎宿は元和9(1623)年、品川・神奈川両宿の伝馬負担を軽減するために開設されました。川崎宿は他の宿場町と比較して最後の方に成立した宿場です。

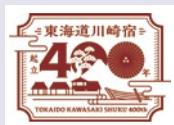
川崎宿は新宿・砂子の2町から始まり、その後、久根崎・小土呂を加えた4つの村で構成されていました。江戸口土居から京口土居までの距離は約1.5km。ピーク時の旅籠の数は天保期に編集された「東海道宿村大概帳」に記された72軒で、神奈川県下9宿の内3番目の旅籠数でした。特に「万年屋」という旅籠は当時の川崎宿の旅籠の中で最大規模を誇り、外交官ハリスが宿泊したことでも有名です。名物「奈良茶飯」は『東海道中膝栗毛』の中で弥次さん喜多さんも食べたと言われています。

現在、当時の面影は空襲によりほとんど消失したものの、川崎宿モチーフのフラッグやタペス

トリーがはためき、あちこちのシャッターやトランスボックスなどに浮世絵が描かれているのを見ることが出来ます。また地域住民を中心に、「東海道川崎宿 2023まつり」(宿場まつり)やスタンプラリーを開催するなど、賑わいは今でも健在です。令和2年度は川崎宿起立400年を記念したロゴマークの募集・投票を行い、決定しました。募集・投票共々、地元川崎からはもちろん、市外・県外からの参加者が想像以上に多くありました。

そんな川崎宿ですが、令和3年2月5日、「地域が主体となり一体となって盛り上がるプロジェクト」を企画・実施することを目的とした組織『川崎宿起立400年プロジェクト推進会議』が立ち上がりました。実行委員会形式ではなく、推進会議の構成員である諸団体が主体的にプロジェクトチームを立ち上げ、相互に連携しながらプロジェクトを実行していくものです。町内会・自治会、商店街、市民団体といった地元の方々や、金融・宿泊・交通分野における各企業など、53もの団体(令和3年5月時点)が推進会議に名を連ねています。

本プロジェクトのテーマは「結ぶ」です。400年の歴史とこれからの未来を結び、人と人をも結ぶ、という思いが込められています。推進会議では、地元の団体や企業はもちろん、地域や宿場を越えた連携・ご協力もいただきながら、未来と歴史、そして人と人が結ばれる、そうした川崎宿400年にしたいと考えています。



川崎宿400年ロゴ



『東海道五拾三次 川崎・六郷渡舟』 東海道川崎宿 2023まつり

